

医療事故対応シミュレーション訓練取組みの評価

福井赤十字病院 看護部

吉岡 光枝 井上恭久子 山内 幸子

An evaluation of the training program for the treatment of the medical accident

Mitue YOSHIOKA, Kikuko INOUE, Yukiko YAMAUCHI

Department of nursing
Japanese Red Cross Fukui Hospital

Key words : シミュレーション、医療事故対応、意識調査

はじめに

本院では、事故発生時の対応能力を高めリスクを最小限にとどめることを目的に、平成18年度から医療事故発生時対応シミュレーションを実施してきた。

初年度は看護部が中心に18部署が参加し、シミュレーション事例は自由とした。2年目は、過去のアクシデントを取り入れた事例を実施した。

今回看護職を対象とした意識調査により、シミュレーション訓練の取組みの評価を行ったので報告する。

I. 目的

シミュレーション訓練の取組みの評価を行い、訓練の効果を明らかにする。

II. 方法

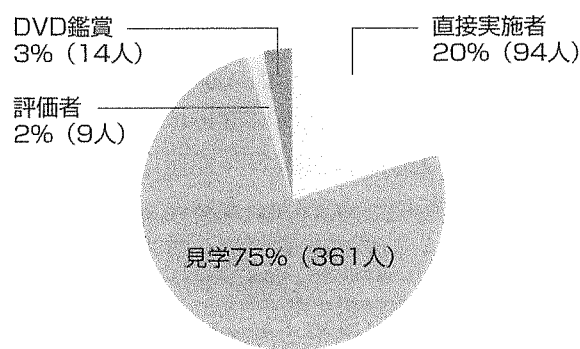
看護職を対象とし、シミュレーション訓練実施2年目（H19年12月）に、質問紙による調査を実施した。看護職478名（看護師449名、看護助手29名）に属性（職種・年齢・本院における経験年数）、シミュレーション訓練への参加形態、緊急事態遭遇経験の有無及びその場面、参加後役にたったか（連絡・観察・報告・処置・記録を5段階評価で調査）を調査した。分析にはSPSS 12.0Jを使用し、属性ごとに差があるかをT検定・一元配置分析ならびに多重比較を用いて検討し、有意水準を5%とした。

III. 結果および考察

看護職の平成19年度のシミュレーション訓練参加率は425名（90%）であった。参加形態は見学が361名（75%）と最も多く、次いで直接実施者が94名（20%）、DVD鑑賞が14名（3%）、評価者が9名（2%）であった。<図1>

シミュレーション訓練実施後調査時の過去1年において緊急事態遭遇経験有りは272名で全

<図1>シミュレーション訓練の参加形態

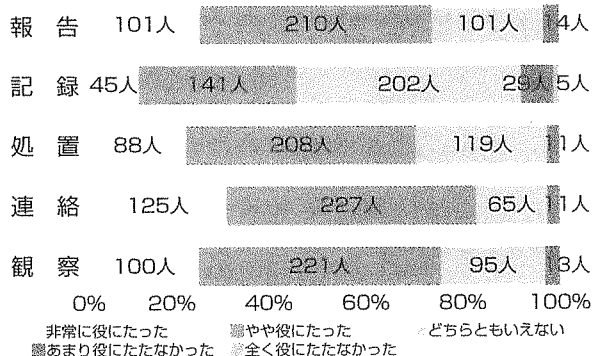


体の57%であり、看護師は59%、看護助手は20%が経験有りと回答していた。遭遇場面は、呼吸停止状態・急な意識消失・転倒転落での負傷の順に多かった。

「参加後役に立ったか」の質問では、得点の平均値はそれぞれ連絡4.09、観察3.95、報告3.93、処置3.88、記録3.45であった。各項目の5段階評価の内訳は<図2>に示す。

記録の得点が低いのは、記録に対する評価項

＜図2＞各項目の5段階評価の内訳



目が少ないことが原因と考えられる。医療事故時の記録は大変重要であり、新たな教育の試みが必要である。

5項目合計得点の平均値は、過去1年間の緊急事態遭遇経験有りが有意に高かった。＜表1＞また本院における経験年数では有意差がみられなかった。＜表2＞これよりシミュレーション訓練参加の継続は医療事故発生時対応能力を高めることにつながると考えられる。

各年代の5項目合計得点は、20歳代19.76、30歳代19.26、40歳代19.49、50歳以上18.12であり、20歳代と50歳以上で有意差がみられた。＜表3＞これより若い看護職に対して取組みの効果があったと考える。

シミュレーション訓練への参加形態は直接実施者に比べ、見学や評価者、シミュレーション訓練内容をビデオ撮影したDVD鑑賞など間接的参加が圧倒的に多かった。しかし、シミュレーション事例は各部署特徴的なものであること＜表4＞、見学者からは「実際の緊急事態の場面状況、スタッフの行動が解りイメージできた」「事

＜表1＞緊急事態遭遇経験と5項目合計得点の関係

緊急事態遭遇の経験	5項目合計得点
経験有り	19.64
経験無し	18.80

* p < 0.05

＜表2＞経験年数と5項目合計得点の関係

経験年数	5項目合計得点
1年未満	19.57
1年以上3年未満	19.68
3年以上10年未満	19.40
10年以上20年未満	18.97
20年以上	19.08

有意差なし

＜表3＞年齢と5項目合計得点の関係

年齢	5項目合計得点
20歳代	19.76
30歳代	19.26
40歳代	19.49
50歳以上	18.12

* p < 0.05

故当事者のフォローの大切さがわかった」などの意見が聞かれた＜表5＞。これよりシミュレーション訓練への間接的参加からでも新たな学びとして役立っていることが考えられる。

シミュレーション訓練の目的は、本院の事故対応体制の見直しと強化・教育・安全文化の定着である。シミュレーション参加者からは、「実際の緊急事態の場面状況、スタッフの行動が解りイメージできた」「部署内で毎日メンバーを代えて練習を行うことで、経験のあるスタッフ

＜表4＞H19年度シミュレーション訓練日程一覧（一部抜粋）

実施月日	時間	部署名	事例内容	評価者	リンクナース
7/21 (金)	14:10	3-5	食堂で食事中、窒息	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇
	14:30	3-3	夜間巡室時に予測外の患者の呼吸停止	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇
	14:50	透析室	透析後、ショック時の対応	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇
8/18 (金)	14:10	1-8	坐薬の重複によるショック	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇
	14:30	2-8	術後肺梗塞発症	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇
	14:50	2-7	リハビリ開始に伴う身体的変化による事故	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇
9/15 (金)	14:10	1-7	ベッド転落による頭部外傷	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇
	14:30	2-6	入院直後、急性呼吸不全による突然の呼吸困難	〇〇・〇〇・〇〇	〇〇・〇〇

参加（見学者）人数（10～95人/回）

＜表5＞シミュレーション訓練後、見学者からの一言

- ・実際の緊急事態の場面状況、スタッフの行動が解りイメージできた。
- ・医師の指示の復唱がなかった。
- ・多くの外来患者がいた場合、処置できる場所の確保を日頃から考えておく必要性を感じた。
- ・浴室からの声はスタッフステーションまでは届かないことがわかった。
- ・事故当事者のフォローの大切さをわかった。
- ・PHSに緊急時の連絡先が入っていて良いと思ったので参考にしたい。

＜表6＞参加者・部署の反省

- ・緊張のある訓練を繰り返すことで、再認識する場を与えられてよかった。
- ・練習した甲斐があった。自信につながった。
- ・日頃より、緊急物品の準備および確認が必要だと思った。
- ・部署内で毎日メンバーを代えて練習を行うことで、経験のあるスタッフの知識や技術を得ることができ勉強になった。
- ・医師を交えながら練習していくことで、スタッフ全員（特に新卒）が急変時の勉強をする機会になった。
- ・思った以上に見学者が多く、場所が狭く動きが取りづらかった。

の知識や技術を得ることができ勉強になった」などの意見が聞かれた。＜表6＞各部署での場面設定や人選などシナリオ検討の過程を踏むこと、実施後の講評や質疑応答などによりさらに効果が得られたと考える。

IV. 結 論

シミュレーション訓練実施2年目（H19年12月）本院看護職を対象に意識調査を実施し、以下のことがわかった。

1. シミュレーション訓練の取組みは20歳代に効果があった。
2. 過去1年間の緊急事態遭遇有りが連絡・観察・報告・処置・記録の5項目合計得点が高く、シミュレーション訓練の取組みの効果があった。
3. シミュレーション訓練の参加形態を問わず、訓練に参加することは新たな学びとして役立つことができる。
4. 記録に対する教育はシミュレーション訓練では限界があり、新たな教育の試みが必要である。

おわりに

平成19年度は看護部に加え放射線部、リハビリテーション科部がシミュレーション訓練に参加した。全職種を対象としたシミュレーション実施前調査（H18年3月）によると、医師・看護師以外のコメディカルのうち13%が緊急事態に遭遇していた。今後は職員全体への浸透を目指す必要がある。

参考文献

- 1) 江上菊代、奥村百合子：事故後対応のための院内訓練の実際、看護管理 vol.17 No2：129-134、2007